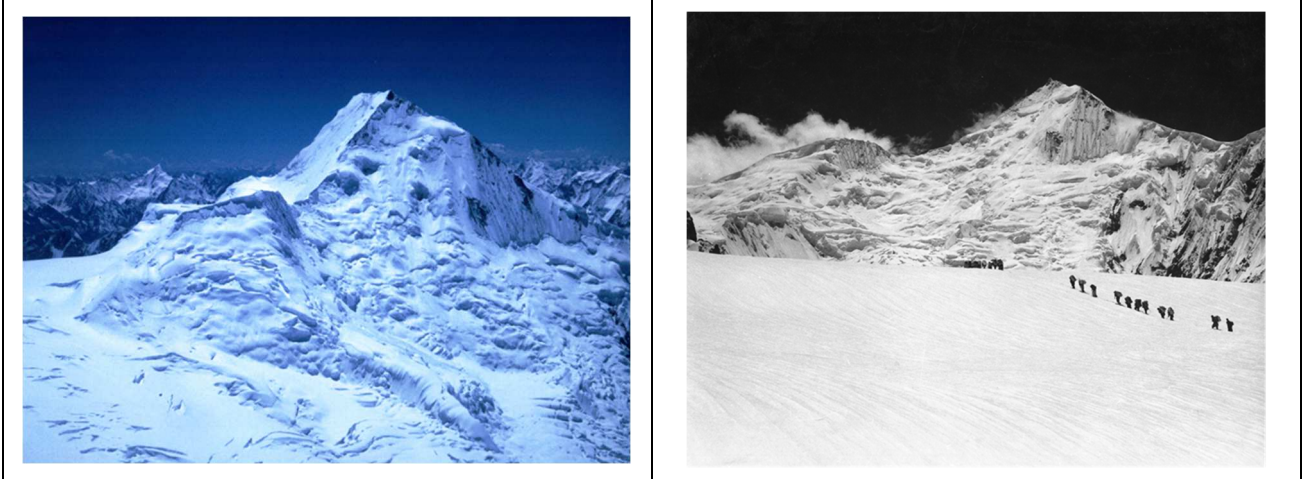


「チョゴリザ初登頂50周年記念シンポジウム」に参加して

“パイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエンス”をテーマに2008年11月3日、京都大学芝蘭会館稲盛ホールにて京都大学学士山岳会(AACK)主催の標記「チョゴリザ初登頂50周年記念シンポジウム」が開催された。多くの京都大学関係者はもちろん宮下秀樹JAC会長、重廣恒夫JAC関西支部長、塚本圭一JAC京都支部長等に加えて広く東北、関東、九州方面の山岳界から多数の出席があり、総勢120名を越える盛大な会であった。

1958年は桑原武夫氏率いるAACK遠征隊がカラコルムの処女峰チョゴリザ(7654m)の初登頂に成功した年であり、今西錦司氏らがアフリカで類人猿の学術調査を開始した年、西堀栄三郎氏らが初めて南極越冬に成功した年であった。その後、ヒマラヤ、南極、アフリカなどでAACK会員の多くがパイオニアワークを実践、多数人材を育成し、新しい学問のフィールドに果敢に挑んでいる。わが国の登山・探検・フィールドサイエンスにおいてその先駆的な役割を果たしてきたことは広く認められていることである。50周年を機会にそれらの活動を振り返り、次の進むべき道を論議しようという趣旨でシンポジウムが開催された。



「気候変化とヒマラヤの氷河」藤田耕史氏(名古屋大学準教授)は昨今のヒマラヤの氷河後退を観測から得られた結果より報告。ヒマラヤでは氷河の融解がない冬に温暖化しており、夏には顕著な温暖化は見られない。氷河の縮小は降雨量が減っているからだ。降雨量の減少の原因は解らないなど、単純に地球温暖化すなわち氷河の縮小とはならないことを示された。

「高所医学からフィールド医学へ」松林公蔵氏(京都大学教授)は高所医学から発展して、高知県の香北町において、高齢者の健康維持、介護予防に関する地域介入研究を約15年にわたって継続している取り組みを解り易く解説。シンポジウム参加者の多くが高齢世代であり、大いに参考になったと思われる。

「南極初越冬とその後の50年」横山宏太郎氏(農業・食品産業技術総合研究機構)は、昨今の様変わりした近代的な越冬隊と初期の苦労がうかがえる古い写真でその差異と発展を示された。

「アフリカの森とチンパンジー研究の未来」松沢哲郎氏(京都大学教授)は、“アイちゃん”の子供たちが1から9までの数字をモニター画面でバラバラに配置したものを二、三秒見せた後にその数字を白く塗りつぶしても順番に指でなぞって見事におやつを取り出す様子をビデオで示し、チンパンジーが人間より優れた面があることを比較認知科学的視点から観察した結果を聴衆に知らしめた。

「雪氷生物学から野生動物研究へ」幸島司郎氏（京都大学教授）は、雪の上をごそごそ歩き回っている雪虫の研究から氷河に住む昆虫やミジンコを世界で初めて発見し、氷河にも生態系があることを明らかにした。各地の氷河生態系を調査し、その特性や地球規模の環境変動に対する影響について発表。また、イルカやオランウータン、サイ、オオカミなど様々な生物の生態や行動の新しい発見を発表。

最後に平井一正氏（神戸大学名誉教授）が「チョゴリザ登頂から50年・未知への情熱を育てた京大山岳部の土壌」と題してそのよき伝統と文化継承の必要性をまとめとされた。いずれの講演者も京都大学山岳部の出身者であるが、講演内容が深く新鮮で、それぞれもう一度じっくり聞きたいと思わせるものであった。

このシンポジウムの強力な推進者はチョゴリザ初登頂者である平井一正氏である。チョゴリザと言えば「花嫁の峰」と呼ばれるように美しい山容とともに1957年に頂上アタックを悪天候のために引き返す途中、稜線にて行方不明となった超人、ヘルマン・ブールの名前が思い出される。1958年、AAACKチョゴリザ遠征時にそのキャンプが発見され遺品を回収、それがイタリア隊に託されてブール夫人の元に届けられた。平井一正氏は2008年秋、南ドイツのラムソウにてハウス・ヘルマン・ブールというペンションを今なお経営されているブール夫人を訪問、ブールと共にチョゴリザに挑戦したクルト・ディームベルガーを交えて50年ぶりの邂逅のひとつを過ごしている。（JAC会報「山」2008年10月、No. 761に記事有）シンポジウムにそえる一つのエピソードであるが、このために渡欧された熱意にも感服する。

昨今はヒマラヤの処女峰登山や、パイオニアワークの時代はもう終わったと言われている。特に大学山岳部は部員数減少が顕著である。新しい課題を提示して登山の魅力を再び取り戻すことがヒマラヤ7000m処女峰初登頂時代を謳歌した世代の責務ではないだろうか。たとえばチベットの広範囲に渡って存在する数多くの6000m級処女峰の登山が一つの新しい方向だと考えられる。これらの山々は険しい山容のものが多く、より困難な登山を強いられよう。

このたびAAACKの輝かしい歴史と現在の活躍の一端に触れ、それを賞賛する一方、その影に悲しい遭難の歴史も併せ持っていることを思い出し、これからの課題を考えつつシンポジウム後の宴を後にした。

井上 達男 （神戸大学山岳会）